

特231

98

本
と
馬

本
と
馬
の
巻
頭
紙



始



特231
98

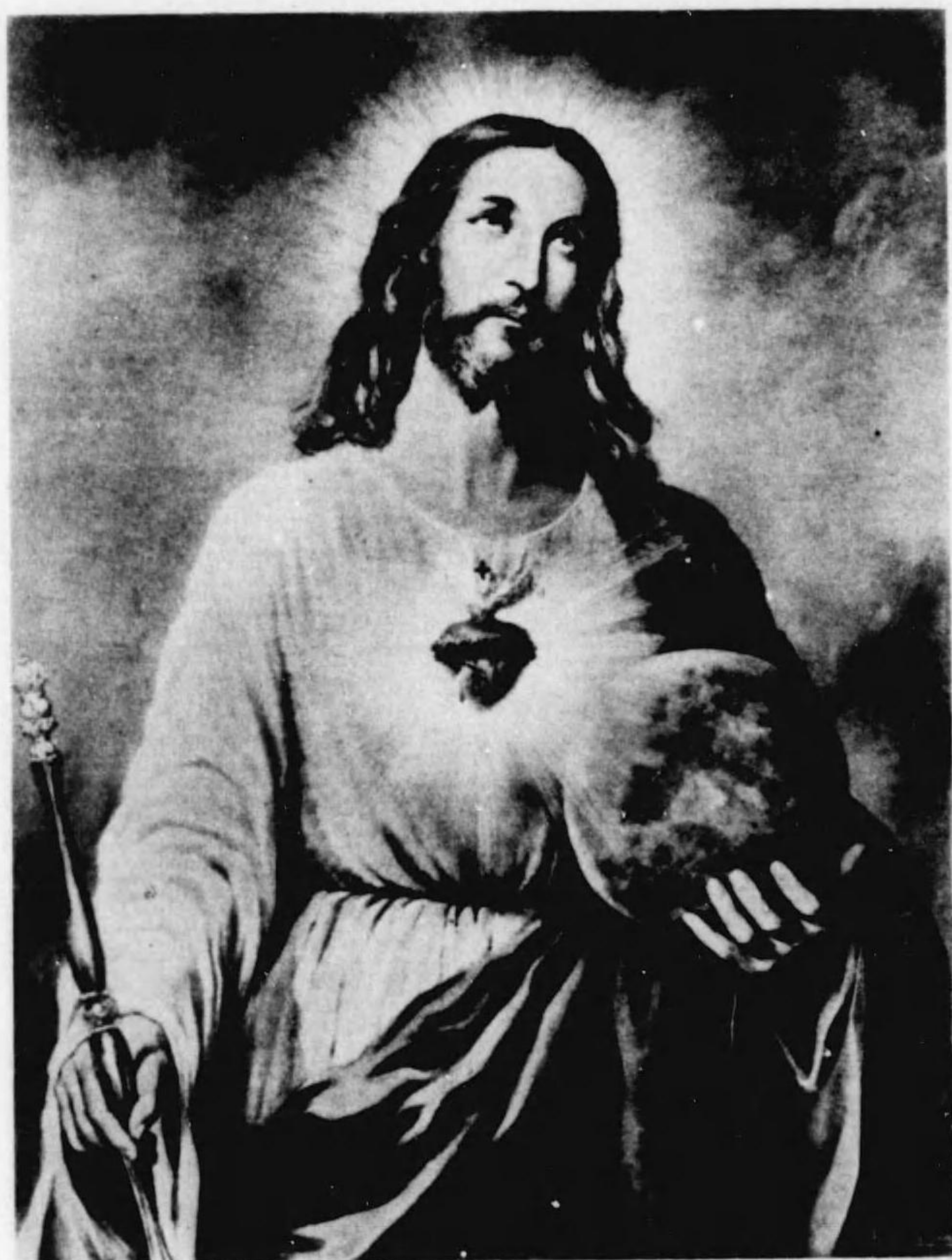


マテオ・クロウリー・ブーヴィ述
岩下 壯一 譯

岩下

公教神學校發行





へ給せら來を國聖



序

我が公教神學校に、マテオ神父の光輝ある長期滞在を得たことは、言ひ盡し難き天の恩寵であつたと信する余は、同師の遺訓が一卷の書となつて、長く學生の座右に留めらるゝことを以て最大の喜びとする。學生諸子は師の雄辯を親しく、幾度も之を耳にした。諸君の耳朵には、今尙その餘韻がつきないであらう。その靈訓の忘るゝに忘れ難きものあるは師の徳の然らしむる所以である。今、師が重ねてこれを文書の上に留めらるゝに於ては、又更に師の心を深く汲む所なきを得ない。只憾むらくは師の熱辯と高姿の同時に紙上に寫し留まらぬことである。

諸子よ、讀め、幾度も反覆して讀め。以て心の糧とせよ。而して、日本の眞使徒を自ら大

成せよ。ミサ聖祭を尊び、聖心の愛に培はれて司祭の任に應はしく育て。これが我らの敬愛するマテオ師の愛に酬ゆる第一義ではあるまいか。識して序となす。

昭和十一年九月

東京大司教 ア・シヤムボン

目次

序

一、緒言	一
二、嚴肅なる決定期	七
三、日本國民性の超自然化	二二
四、沖に漕出せ	二五
五、重要なる徳目	三三
謙遜	三三

犠牲的精神……………	三六
信 頼……………	四三
熱心と發奮……………	四六
六、聖母と司祭……………	五三
七、司祭の至上愛……………	五九
八、イエズスの聖心……………	六六
聖心への祈り……………	七八
九、ミサ聖祭……………	八〇
十、結 尾……………	九三

遺 訓

十聖父と聖子と聖靈の御名によりて、亞孟！

日本神學生に贈るわが靈的遺訓

マ
テ
オ

一 緒 言

親愛なるわが神學生諸子！

私は今や東洋を去らうとする。東洋を去つて、他の國々にゆく。默想週間、その他の靈的
 教話に際して諸君に説いたと同じき教訓を宣べんがために。今回私が諸君に親しみ得た事の

喜びの大きかつただけそれだけ、袂別の悲愁も亦一しほであるが、同時に我等の離別は常にたゞ肉體の上に於てのみ相分かるゝので、精神的には、眞理の裡に、又主なる神イエズスの聖心の中に、私は常に諸君と共にあつて、須臾も離れざることを確言する。いでや、私は諸君をかの崇むべき「友」の手に託して去らう。希くは諸君も亦心霊を以て私の傳道旅行の伴侶たらむことを。主イエズスの愛に由り、斯くして一切の距離は短縮せられ、時間も亦消滅するのである！

○

私の教話に就ては、たとへその概要なりとも、記録に残すやうにと、諸君の熱望があり、私も亦それに對して幾頁かの靈的遺言とも謂ふべきものを執筆すべきことを約束した。本書が即ちそれなのである。諸君がこれを私の記念に、否數ならぬ私一個人の記念にといふよりは、寧ろ諸君が嚴肅にして且つ決定的なる召命の、感激に充てる日に浮世の辛苦を具に味つた司祭としての確信と、父としての愛とを以て申述べた小教訓の思ひ出として、本書を保存

せらるゝならば私は満足である。

私は又本書を、諸君が私に獻げてくれた子としての愛に酬いんがために、且つは私のための祈りと、私の指導の下に屢聖櫃の前に繰返された其の忠誠の約束の代償として諸君に捧げる。だが申す迄もなく、私は本書が感謝を以て諸君各自の手に受取られた後に空しく書冊や帳面の間に塵に埋もれてゐるやうな運命に置かれることをば欲しはしない。私は諸君が本書を折にふれ、時に應じて、——敢へていふ——毎月、第一金曜日毎に——之を默想の資料として使用せらるゝ様にお願ひせまほしく思ふ。或は又六月、聖體の祝日後の八日間に、聖會の精神と、教皇ピウス十一世聖下の御希望に従つてイエズス聖心の大祝日の準備として、ふさはしく其聖日の迎へられんがために、更に又品級祕蹟の各段を受領する諸君の準備默想の間に本書の熟讀せらるゝ様に願はしく思ふ。

否、更にまた、何人にも免れがたき世の戦ひの日に、諸君の崇高なる召命を危険に曝して、替へ難き諸君の決心を鈍らす苦惱の時、その他良心の危機に面した場合、諸君は本書を手

して速に聖堂へと走らねばならぬであらう。そこに於て、「善き師」の膝下に、熱心に聖靈の光りを求め、信頼を以て諸君の天の母なる聖母、聖職者の元后に代禱を願つた後に、心を沈めてこの書——諸君が召命を守り固めんがためには如何なる犠牲をも厭はざる此の一友の心からなる勸告を読んで頂きたい。この讀書の間に——私は諸君に堅くお約束をする——身は遠く相離れたりと雖も、守護の天使を通じて、私は諸君の勇氣を振起し、信仰を強うせしむべき祝福を必ず送るであらうことを。

今本論に入るに先つて更に一言附加へてをきたい事がある。それは本書が大體に於ては私の説教と勸告の綱要に過ぎぬものであるとはいひ乍ら、個人的、或は團體的に、苟も私が諸君にお話をするに當つては、其の時、其の場合、主の御思召を伺はないでは——即ち聖櫃の前で諸君に語るべき事項に關して默想し、特に諸君のために祈らないでは何事をも語りはしなかつたといふことである。この一事は、將來諸君自らが説教者としての勤めを盡される時の参考にもならうと思つて、私は殊更に申し加へて置く。司祭なる者は單に神の言葉を陳述

するに過ぎぬ演説家ではない。其説教の前後に於て特に「祈りの人」であることを私は諸君に牢記して頂きたい。司祭は其聴衆のために、特別の光明と従順の心と實行の力とを祈り求めなければならぬものだ。使徒たるもの、雄辯は、それが如何に優秀、卓越の傑作であらうとも、若しそれが單なる言語の雄辯であつては何にならう。説教が神の御言の力其人に於て活き、聴く者の良心を振蕩せしめ給ふ主イエズスの能力なるべきことは論を俟たぬではないか。この祈り、この説教と、二重の力によつて、私は諸君が、神學生生活の間のみならず、後來ながく持續すべき堅固なる事業をもこれに依つて成就せしむる様にと願つておいた。而して私自らも、諸君を通じて私の深く愛する日本の上に、諸君によつて信仰に導かるべき人々、並びに諸君の司牧に託せらるべき主の群にかくして働き及ぼす積りであつた。何となれば聖職の召命に於ては、司祭と信者の靈魂、牧者の聖徳と傳道の効果とは絶對不可分離の關係を有するものであるからである。私は繰り返し諸君にお願ひする。斷じてこの責任を忘却せられざらんことを！

ひとりよく眞理と生命の言葉を保ち給ふイエズスよ、今汝の將來の傳道者達に語り給へ。冀ふ、心血と愛の火を以て諸君の心魂にこれが銘記せられんことを。わがが弱く拙き言葉を通じて、願くば主の希望と教訓を神學生等の胸間に印し給へかし。その昔汝の忠信なる淨配とし、使徒として選みませし聖女マリガリタ・マリアに對して主自ら爲し給ひし如く、希くは、主よ、御胸の御創痕を披瀝して讀者の心眼に汝の熱心なる友、いつくしみ深き聖心の使徒等に盟約し給ひし恩寵と、聖徳と、力と、傳道効果の寶玉を啓示し給はんことを！ 取り出で、願ふ、彼等に、聖使徒ヨハネになし給ひし如く心を盡し、意を盡し、精神を盡して汝を愛するの眞知を教へ、人々の知らざる汝の愛に酬ゆるの道をば世に洽ねく知らしめ給はんことを！

聖母の御取次ぎによりて彼等すべての心に御國の格らん事を！ また彼等を通じ、品級の祕蹟に基き、多くの人々の上にその國の格らん事を！ 主よ、語り給へ！

二 嚴肅なる決定期

親愛なる子等よ

諸君の以下讀まれんとする一切の斷言の根柢に横はる大原則を、私は先づ以て諸君の胸底に熱火を以て印刻しようとする。——即ちそれは殆んど例外なしと斷言して憚らぬ程の攝理的なる法則によつて、諸君の司祭としての將來が、必ず神學生としての現在によつて決定せられるといふ事である。換言すれば將來の司祭としての諸君の運命は神學校に於て既に決定せられるのである。一生の間、自らにも、他の人々にも及ぶべき効果の種子を、諸君は既に神學生時代に於て蒔きつゝあるのである。

四十二年間或る大神學校の校長を勤めた一老司祭が嘗て私に語つたことがある。「貴師は只今學生に向つて、將來司祭となつた時のために、神學校生活の義務に對して極めて忠實且熱心であれよと御説教になつたが、私の多年の經驗に照して見ても全く事實が其通りである。私は熱心な神學生の一學級を見る度毎に、最早彼等の將來の堅忍と、傳道的効果を決して疑ひはしない。が翻つて靈的生活に精進もせず、熱意もなく、平々凡々に信心に日を送るのみを輩を見ると、實に私は懸念に堪へないのです。奇蹟か何かでもない以上、彼等は唯のお役目ふさぎの聖職機械に成り了るのみならず、遂には終りを完うすることさへ困難な危険が多分にあるのです。實に神學生の如何で、將來の司祭の如何が定まると申さねばなりません」と。實にもよく真相を穿つた言葉なる哉。不勉強に過した者が一生其結果を苦しみ通す様には自己の召命と、靈的陶冶に専心せず、その義務を怠つた神學生の末路こそは悽慘の極みではないか。司祭は決して學者や、藝術家や、軍人以上に、速成すべき筈の者ではない。細心の修養練達が肝要である。これ諸君が主の御前に沈思默考すべき一大事項ではないか。諸君の

双肩には將來如何なる重大責任の負はさるゝ事であるか。之を考へるならば、決して輕々に自分の召命問題を取扱ふべき限りではない。この最も微妙な問題に關しては學問に於て師事すると同じく、必ずやあくまでも賢明なる指導者に服従し、節制克己、以て聖徳の達成に努力奮勉せねばならない。

考へても見るがよい。暴風雨に際して狂瀾怒濤のうちに浮沈する船舶の船長が、航海術も碌すつぽ心得ず、無經驗にして迂濶極まる青年水夫であつたとして見たらどうであらう。神學校で眞面目に勉強も修養もしなかつた若い司祭等に托された教會や小教區の運命は、寔によくこれと相似るといふべきではないか。あの不熱心な、克己心の乏しい、怠け者の神學生に、如何して、將來未信者を改心せさせ、さ迷ふ靈魂の漁りとしての大使命が遂行できるであらうか。之は今更言ふ迄もない事である。

何人も己れの有たざるものを人に施すことはできない。凡そ貴重なもので勤勉と辛苦忍耐なしに得られる様なものはこの世には存在しない。諸君の神學校生活はこれを如實に物語る

ものである。

私は心から親愛なる諸子に冀ふ。主が諸君の靈に實りあらしめんとして賜うたこの貴重な期間を決して決して空しうすることがあつてはならぬ。寸陰をも惜しんで、將來他人の靈魂を富ましめんがために、現在自らの心魂を養ふことを念とせられよ。先づ第一に眞劍に聖職者にふさはしき一切の學問を研究し、能ふべくんば學藝の達人たることを期せられよ。これ聖會の希望する處であり、又眞に尤もなる要求でもあるのである。

併し乍ら、それにも増して、主の愛のために、神學校の規則を嚴守することを心掛けられよ。即ち眞劍なる敬虔——ある程度までよく祈ると謂ふのではなく、眞によく祈り、靈的修業を好愛し、完徳を熱望し、指導者に就いて自己の缺點を矯め正して、堅固な道心を培はねばならぬ。

神學生が淨き歡喜にみちて、明朝快調で、互に愉快的遊び友達であるべき事は當然ではあるが、同時に、神學生は聖堂に於ては信心の模範であり、教室、自習室に於ては眞面目な勉

強家でなくてはならない。而して何時、何處に於ても、外的には他の人と異つた、癖のない、極めて單純、無邪氣な、併しながら最も熱心な青年でなければならぬ。

私は今日迄に、恐らく二百以上の神學校をば參觀したと思ふが、各地の立派な學校の中でも、あの偉大な教皇ピウス十世が嘗て靈的指導者だつた神學校の印象を想ひ起す時、胸に湧く其感激は、到底筆紙に盡し得べきものではないのである。彼處の様な感嘆すべき聖域に於ては、實にイエズスは、眞の王であり、主であり給ふに相違はないと感ぜられる。そこには丁度日本に於ける諸子の如くに、主に特別に召し出された青年達が、將來の世を救ふべきキリストとして、ナザレトに於ける幼年時代のイエズスと同様、智慧と^{まは}齡と恩寵にいやましつゝ、陶冶訓練せられつゝあるのである。

イエズスのために進路を開拓すべき先驅者として、諸君の前途にはながき旅路が横はつてゐる。今から神的生命と超自然的能力と、愛と光りと力とを豊に蓄積貯藏して、主の親しき友とならねばならぬ。かくてのみ諸君は偉大なる使徒となることが出来るであらう。

三 日本國民性の超自然化

聖寵は自然の基礎の上に築かれる。人間の本性は原罪によつて墮落したにも拘らず、猶幾多の貴重なる寶を保有した。諸子は之を用ゐて以て、自己聖成のためにも、傳道のためにも益用すべきである。勿論諸子にも幾多缺陷の存する事は免れ難い。だが同時に、確かに日本人として少からぬ天賦の良性質を有するものである。これをば神の賜へる良資として苟もすることなく、この資を利殖し、運轉して、生涯の終りに其預け主に返濟するのが主の御思召である。

來朝未だ日猶淺き余は、素より日本精神を徹底的に認識し得る筈もなく、又これに就ての判断を下すべき資格も有せないが、其美しき特質の若干を認めて、之を讚美するには余と雖

も既に充分な觀察をなし得たと信ずる。

第一に驚くべきは國民の優雅な心情である。深き禮讓の滾々と湧き出づる高尚な氣品である。恩恵や愛情や友誼に對して奥床しき感銘と謝恩の心を有することである。

されば余は諸子が司祭として、同じく神との關係に於ても、この微妙繊細なる心情と品位とを失はれざらむことを望む者である。諸子よ、乞ふ、主が無償にして豊に與へ給うた無數の恩寵に對して、絶えず感謝せられんことを。

主イエズスコそ先づ第一に人の奉仕を受け給ふべき者ではないか。日本人がその心情に植付けられた凡ての高貴なるもの、精華は、彼にこそ捧げらるべきものである。

第二に、日本人は神聖なる權威に對する深き尊敬を有する國民である。これ眞にしかあるべき事であつて、主は神來の權威によつて保證せらるゝ秩序の上に國家とキリストの聖會と

を建設する様にと求め給ふものである。此の一點に關しては、現代は正しく所謂非常時に直面してゐる。無秩序と無政府状態の宣傳が到る處に行はれてゐる。

併し乍ら、規律は所詮、重じられねばならない。素より吾人の謂ふ規律とは必ずしも兵營のそれではない。超自然的な、それ故に人間の眞の自由を保持する所の最も強固な、最も高尚にして且つ光榮ある戒律それである。此即ち聖職者にはふさはしからぬ過度の獨立心より生ずる恐るべき危険より諸君を守る所のものである。

靈魂司牧の明智と、情念や出來心を抑制する自己統御の力を與へられむがために、諸子が自らよく服従することを學ばれんことを望む。

第三に最余を感動せしめた事は日本民族のもつ堅忍不拔の精神である。彼等は從容として困苦に甘んじ、患難と戦ひ、逆境に處してよく主の哨兵の如くに自己の立場を固守し、しかも沈黙を守つて之を誇示しようとしな。そこに極めてよき兵士としての豊かなる天分があ

り、同時にイエズス・キリストのための殉教者たるに應はしき氣慨が窺はれる。

諸子よ、希くは、この偉大なる國民性を超自然的犠牲の精神に迄止揚して、諸子自らが進んで余の管見の誤らざることを立證せられむことを！

聖者の行へる克己力行主義を實踐して十字架の前に懦夫たる勿れ。これを以て、司祭と共に司牧する信者に賜へる神の恩恵として、飽まで之を好愛するの域に達せられんことを望む。

心してキリスト教的柔和と親切との擬態たる情弱の心を唾棄せよ。凡そ正銘の徳は常に恒に男性的なる力強きものであるからである。

第四、日本人の生活に於ける一切の本然美は、その唯一の根源たる家族制度から流れ出づる。家庭は日本人自らの聖殿である。

世人は近代生活がこの神聖なる日本道德の源泉を汚濁したと云ふが、今日と雖猶祖先の遺風を守る大部分の日本人にとつては、この家族的なる精神と徳とは保持せられて居ると云

つても、少しも過言ではあるまい。親愛なる神學生諸君、この精神を移して聖職者の間に植ゑ、同僚との交際に實を結ばしめよ。余は願ふ、諸子が明日、自ら司祭として小教區を司牧せらるゝの日に於て、すべての宣教師が、諸子の教會に變りなき衷心よりの兄弟的愛を以て迎へられ、諸子の教會には凡ての同僚が、冷かなる一片の禮儀作法を以てではなく、常に溫き基督心を以て迎へらるゝ家庭たらんことを。

心を籠めた世話や、助力を幾度となく交換することを心掛け、かの詩篇に「兄弟の相俱に睦むはいかに楽しく美しき哉」とある言葉が實現される様、深き愛徳によつて超自然的家族精神を涵養せらるべきである。

己れの愛情を瀝ぐ家庭を要求する自然の欲望は、夢々、これが司祭職に由つて消滅すべきものではないことを記憶して頂きたい。一切の高貴なる自然的欲求と同様に、此も亦聖籠によつて、より高き境地に擧揚せられ、轉換せられ、而して活かされねばならない。

第五、外國人に最深の印象を與へた日本人の特徴の一は其節制と勤勉の生活である。この二點に關しては、日本人はたしかに他の追従を許さない模範國民である！ キリスト信者を作るには、これが如何に優れたる好適の素質であるかは、喋々の必要もない事である。

諸子よ、一生を通じて、自らの節制を忘るゝな。これこそ心身潔白の秘訣である。極則である。極めて稀れな例外を除いては、此のキリスト教道德に適ひ、衛生に適し、自然に即した生活法を變更してはならない。否々、却つてこの優秀なる國民的習慣をこそ、進んでキリスト教的、司祭的徳に開發し展大しゆくべきが諸子の義務ではあるまいか。

わけでも、諸子には勤勉な生活が熱愛せらるべきである。日常生活を正しく規定して、常に教學の習熟と研究とに必要な時間を作り、また神學、靈的生活に關する文獻と資料の閲讀を怠り給ふな。諸子は常に聖會内の新しき動向、就中教皇の時局に對する指導に對して活眼をひらき、教會の全體から孤立したり、或種の宗教的動脈硬化症に陥らざる用意がなくては

ならぬ。勉強や仕事に方法と順位を立て、秩序的に時間を割當て、司祭的任務の遂行に必要な、貴重なる健康の保持、精力の利用、時間の益用に萬遺憾なき様心掛けられたい。

第六、日本人は清潔を愛する。身體と住宅内外の掃除の行届いた事は、外人の等しく賞讃する所である。これは取りも直さず、自分と他人に對する尊敬を意味するものたると同時に勿論衛生の道にも適つたものである。この教育を主の奉仕に關連する一切の事象——祭壇、祭具、香部屋、聖堂——に應用すべきではないか。「われ汝の家の美しきを愛せり」とある。祭式中、第一の裝飾は聖櫃の周圍を最も細心に清潔に保つことである。

更にこの自然徳を押しすゝめて、諸子よ、希くは遙により多く道德的清淨——靈の完全なる潔白を愛せよ。諸子の眼ざしに於て、讀書、會話に於てこの清淨を損ひ得る一切のものを聖なる畏みを以て遠けよ。この點に關しては極度にも細心なれ。雪白を——百合の花の潔白を愛せよ。あゝ希くは、希くは汚れなき童貞が諸子とその母の御衣のうちに諸子を汚れなく

保ち給はんことを！

第七、日本人は一般に饒舌ではない……。寧ろ聽くことを好愛する。否それのみならず、特に聽くことに忍耐深い。

この素質にして超自然化せらるゝ場合、それこそ稀有な、且肝要な司祭的徳性が諸君に歸するのである。凡そ人の老若を問はず、なべての人より教訓をうくる事をたのしみ、特に長上者よりの訓誡を喜ぶ者、賢明なる勸告に耳を傾くる司祭は幸である。諸子は常に求めて師父的譴責と、傳道に關する長者の良指導をうくるの耳、否その精神を用意すべきである。司祭は常に「學ばん」ことに心掛け深く、苦き教訓を熱心に求追し、感謝と従順を以て一切を受容せねばならない。

諸子はまた更に如上の國民性を將來の信者たるべき人々に之を利用せよ。もしも諸子自らが彼等のために、疲勞と苦杯を厭はず、只偏に彼等のために計るものであることを知るなら

ば、彼等は進んで諸子の言に傾聴を吝まぬであらう。諸子がまことの善牧者であるならば、信徒の耳の聴くに倦み、従ふに疲るゝに至らざる先き、諸子自らが既にその教説の勞のために倒るゝに至るではあるまいか。

新しき信者を得んがためには、眞の使徒らしさ、主の聖心の御榮えのための聖體に對する雄々しき、より大なる信心と熱心と犠牲心とを、既成信者に要求せよ。其結果は諸君自らが驚く程に、神の言葉を聽かんとする熱意の故に彼等は自らを神に捧げ、神の御ために新しき魂を得んとする熱願を振ひ起すのを見るであらう。唯、語るにも、勸むるにも、常に深き眞實の超自然的精神と、司祭的品位に心を用ふることを忘れてはならない。

第八、私に向つて、私が日本人の約束に信を置きうるや否や問ふ人があるならば——諸子よ、歐米人に通有なこの愚問をば、暫く容るせ——私は躊躇なく「勿論」と答へる。日本人は、何事をか成し遂げようと、一旦決心した以上、必ず剛毅と堅忍不拔の精神を以て終りま

でこれをやり通さねば止まぬからである。日本を訪問する外國人に、直ちに眼に入るものは其の文化の普及であるが、この一事は既に之を最も雄辯に物語るものである。一ヶ月で出来ないならば一年、一年で足りないならば更に幾年でも、必ず所期の目的を貫徹するまでは措かぬ。しかも其努力たるや、極めて跳進的であり、飛躍的である。若しそれ一旦神の聖業がこの磐石の如き堅固な性格の上に築かるゝならば、主の光榮のために如何なる立派な、讚嘆に値する大事業が成就するであらうか！ この鋼鐵の鎧の下に司祭としての白熱の心を包んだならば、十字架の聖旗を掲ぐる諸子の邁進の前に何物の支障があり得るであらうか。

併し乍ら、この堅固なる性格に、信仰と、聖寵と、超自然の識見を加へることが肝要中の肝要である。敬虔ならぬ司祭の活動には屢々多くの禍根が孕まるゝからである。

私は聖寵は本性の上に築かれると云つた。實際に、聖人は皆これ意志の人、決斷の人であつた。かゝる場合に聖寵は本性に力を與へた。決斷力に乏しくして溫良に過ぎたる性格が、これによつて強固にせられた。諸子はこれを忘れてはならない。司祭にはその青年時代の訓

練と修養によつて、意志をより雄々しく力強きものになし置く必要がある。司祭の訓練期なる神學校は、人間の地上に於ける最高使命の實現のための使徒——即ち將來のリーダー——を薰陶し養成すべき場所である。聖會と日本とは、諸君の上に偉大なる期待をかけて居る。諸子よ、希くは渾身の力をこめて、「我欲す」と叫べ。かくて諸子こそは、聖寵の助力によつて、諸君の崇高なる召命に應はしき境地に達し得よう。

第九、最後に、全世界の認識し且賞讃する日本人の愛國心に就て考察を試みよう。首都イエルサレムの没落を豫見して流し給うた御涙によつて、主イエズスは祖國と郷土に愛着する自然の義務を超自然化し、謂はゞこれに洗禮を施して、之をキリスト教的徳となし給うたのであつた。愛國者のいふ貴き言葉の最深き意味に於てキリスト信者以上に愛國者たり得るものはないのである。

諸子は嘗に日本人としてのみならず、又キリスト信者として日本を熱愛せねばならぬ。日

本の物質的進歩と幸福とのためのみならず、其道德的向上のために、眞の信仰への歸依のために關心を持たねばならぬ。

特に毎朝のミサ聖祭に於て、また常に熱心なる祈禱と日毎の犠牲により、聖國の精兵として善く祖國のために戦はねばならぬ。

諸子の先頭には聖フランシスコ・サベリオや、無数の殉教者等がある。諸子も亦この戦列に加はるにふさはしからん事を祈る。かくてこそ愛國心は詩的感情の域より脱して、超自然的現實性を帯びたる徳となるのである。

自己の安靜と、時間と生命とを捧げて呉れる以上に、人を愛する者は存在しない。愛國心とは畢竟、犠牲の徳で、夢想や、興奮の類ではない。赤心から出づる愛徳と奉仕である。諸子の麗しき祖國を愛するには、眞にキリスト教的なる、司祭的なる愛を以てせられんことを望むのである。而して同時に、この愛國心の延長として、假令、生國は異なるとも、日本にキリスト教の眞理と、神的生命と、愛とを注がんとために、一切を捨て、一切を犠牲にしたる

人、しつゝある人々を愛されよ。彼等とは兄弟的なる愛を以て交り、聖會とよぶ一致協心の大家族の團欒をつくられよ。

日本人の優しい高雅な心情は永遠の生命てふ最上の恩恵と、其階段であるカトリック教會の祭壇をば、ゆめ忘れることは出来まいと私は確信する。

四 「沖に漕出せ！」

超自然的計畫

諸子の徳と義との程度は、諸君の如き召命をも恩寵をも蒙らず、従つてそれに伴ふ重責を負はない普通信者のそれであることはできない。司祭職といふ比類なき高位に召された諸君はまた確かに、嚴かにこの至上の榮譽に相當する高徳に召されてゐる。神は諸君が聖者たることを欲し給ふのである。諸子には神學校で有し得る唯一の大望、聖者たるの希望が保たねばならない。毎朝のミサ聖祭中にこの望みを燃やし、無限の希望の翼を驅つていよいよ高く翔らねばならぬ。

一體、特種の藝術家やその他の天才などには天稟の資性を要する。何人でも思ふまゝに、

勝手になれる種類のものではない。だが、何人も未だ嘗て、聖者として特別に生れた者はない筈である。人は聖者に成るのである。それは神の恩寵とそれに對する忠實、熱心と奮發との問題であるからである。

教皇聖グレゴリオは聖者になる道を質問してやまなかつた令妹に向つて、激越な語調を以て返答してゐる。「聖者にはなりたいたいと思つてなるのだ。いつも常に全心をあげて、なりたいたいと思つて……」と。

イエズスの將來の司祭たる諸子よ。諸君は嘗て品位ある正心有徳の僧侶と遭逢した事があらう。聖會と主イエズスが洗禮の品級の宏大なる恩寵の結果として諸君に期待せらるゝ所がそれと同程度のことにはすぎないのであらうか。否々、斷じて然らずである。

本來宗教心に富む日本人は、一般に例外なく、眞面目な堅實な徳を愛する。聰明敏感なる外教者は我々に就て案外に要求する處が多い。余は確信する。彼等外教者は自己の信仰に忠實熱心であり、自己の職責に盡瘁する司祭に對しては心中竊かに敬意を拂ひつゝあるのだと。

それはともあれ、主は正當に將來其代理者たるべき諸君に對しては、特に嚴格なる要求を有し給ふので、平凡なる勤務のみには満足し給はない。主は最少限度主義をば蛇蝎の如く嫌惡し給ふのである。

祭壇に近づくに従つて益完徳に近づく様、日毎々々に一步一步前進せよ。日毎に己れの缺點を矯正し、徳を以て魂を飾るべき様、努力せよ。

余がかく諸君を完徳の道へと誘ふのは、これが同時に各自の本分を盡す上の極めて單純なる道へ諸君を導くに外ならぬことに諸君の注意を願ふ。聖者たるには、この大道を踏みはづして、外に何かの不思議な道でもあるかなど考へるならば、それこそ、とんでもなき大間違ひであるからである。云ふ迄もなき事乍ら、主イエズスの諸君に求め給ふ所は、全心を擧げて、神學生としての勤めを盡す努力そのものである。勤めの如何、事の大小難易は問はず、凡そ自己の負ふ任務は之悉く、忠實につくされねばならぬ。實を云ふと、諸君の愛だに大きくあるならば、苟も神の前に於て大ならざる何事もあり得ないではないか。然らば諸君よ、

恐れず進め！

聖徳の山嶺はそこにあつて、それ以外の何物でもない。諸君は聖フランシスコ・ザヘリオや、アルスの主任司祭の様な英雄たらむなど、夢みてはいけない。ナザレトの里に於けるマリアの如く、リジユの修院に於ける小さきテレジアの如く、其日其時の本務に忠實であればそれでよいのである。

イエズスの聖心の諸君に期待し給ふ所は唯この愛の奇蹟のみで、その實現のためには無盡蔵な聖寵の源泉が、神學校には湧き流れてゐる。司祭となられた暁には、更にそれに數千倍する聖寵が與へられるであらう。であるから、たゞひたすらに信頼せよ！ これでいゝ。

この理想實現に不可欠な基礎

熱心な神學生、聖なる司祭といふ立派な聖教建築の基礎となるものは、祈に由つて涵養せられ、發展せしめらるゝ深き靈的生命である。祈といふは祈りを好愛すること、即ち祈の精

神を意味するので、たゞに若干の祈禱を口の先きで誦へるといふことはいふのではない。祈を愛し、祈が自超然的な第二の本性となる程に、その必要を痛感する恩寵を神より得なくてはならぬ。

余はかくの如き祈りの人なる神學生や、在俗の青年を知つてゐる。何人も聖寵の御勧めに忠實なることによつて、必ずやこの境地に到達しうることを私は確言し得る。それには神學校の規定にある靈的修業を、機械的ではなく、心から敬虔に勤める習慣をつくること肝要である。

先づ第一に充分の準備の後、定まつた時刻に必ず行はるゝ黙想、熱心な聖體拜領——勿論感情的な熱心ではなく、強き意志と、大なる望みを以てする所のそれ——ロザリオ、聖體訪問等々が、主との一致の要諦を諸子の心裡に得させ、其結果、自然にこの祈りの術と其必要とを學ばしむるであらう。かくして副助祭に擧げらるゝ時より、教會の公式祈禱なる聖務日課をば味ふことができよう。

告解は自己の聖成に専心する神學生や、司祭の靈的生活には、重大な役割を演ずる。屢、一般的原則としては毎週、特別に罪の赦しのさし迫つた必要がなくとも、この秘蹟をうけるがよい。

諸君が常に潔白と熱心に於て身を保つが爲に、従つて徳にすゝむが爲に、告解は非常に有益であり、且聖寵をより豊かにする効果がある。度々繰返されたよき告白以上に、有効な謙遜と償ひの行爲は外にあり得ない。

熱心な靈魂の平和と幸福

數々の永續的な犠牲を惜しまぬ忠實さを以て其の召命に應ずる神學生——更にまた司祭の最高にして且つ永遠なる酬いは、素よりそれは將來の天國である。聖パウロの言葉を用ふれば、神がその聖なる天使と其友なる聖徒等のために備へ給へる榮え、その甘味はよく筆紙のつくしうる限りではないとある。

併し私は親愛なる諸子に斷言する。この云ひ盡し難き天國の幸福をまつ迄もなく、既に此世に於て、主イエズスの御奉仕に残りなく凡てを捧ぐる人々は、決して單なる幸福といふのではなく、眞に非常の幸福を持つものであることを。

然り、諸子が司祭職のために自ら準備するための戦ひや、犠牲や、努力は、遙に諸君の希望を越えて間違ひなく此世で既に酬いられるのである。

諸君の獻心の程度に應じて、否その度を遙に超えて、諸君の心に満ちあふるゝ平和と幸福とを想ふことなしに、犠牲とか、克己とか、自己放棄を考へてはならない。諸子よ、乞ふ、私の言葉を信ぜよ。この世で眞に偉大で、且幸福なのは、たゞ聖者のみであり、しかもそれが彼等に「十字架のあるにも拘らず」ではなく、「十字架あるが故に」であることを！

若しもイエズスが、聖アロイジオ、聖スタニスラス・コスカ、聖ヨハネ・ベルクマンズ、苦しみの童貞の聖ガブリエル、小さき聖テレジアの如き聖者を諸君の面前に遣し給うて、彼

等のほゝ笑みと共に其心の底を明かす一言をだに語らしめ給うたならば、彼等はこの點に就て、いかに驚嘆すべき多くの不思議を諸君に示すことであらう……。

かの *Jesu dulcis memoria* なる麗しき讚美歌を誦へつゝ言葉の一々を味はひみらるゝがよい。特に

「主は求むるものに、如何にやさしく在すことよ

されば主を見出せし者にとりては如何ならんか」

とのかの神韻漂搖の一節を沈思黙考せよ。まことに「イエズスを愛する言ひつくし難き悦びこそ、人語と思惟を絶する」のである。

この體驗をだに得なば、たゞ聖者のみが此世にあつて味ひ得た幸福が、諸君のものとなるであらう。

五 重要なる徳目

諸子に献ぐる此の小冊子の外に、勇敢なる宣教師各位のために物せる余の黙想の説教を概説した一書をも相添へて呈する。この書の中に本項は更に敷衍せられてある故に、こゝでは唯概要を述ぶるに止める。

謙遜

三個の對神徳に次いで、最根本的でしかも最も稀れな——何故なれば最も困難であるから——徳は思惟と精神の完全な謙遜である。

この高尚な魂の刻印とも言ふべき徳なしには、キリスト教信者の靈的生活に、何等眞面目

な堅固なものは歸し得ない。況んや司祭のそれに於てをやである。

他の何れの徳にもまして、親愛なる神學生諸子よ、今日から此の徳を養ふ努力に邁進せらるゝがよい。蓋し、今日諸君が謙遜であるべき最よき素地は、諸君が今猶若年であるといふ事實に存してゐるとも云へよう。若い時には苦しい事柄も、それほどには辛いとは感ぜぬものであるからである。私は諸君に、すべての聖者の模範によつて保證せられた特別に有効な二の方法を採用することを勧告する。

第一は諸子の長上に對する誠心誠意の完全なる服従である。

アヰイラの聖女テレジアは、主が何故にかくも謙遜を愛し給ふかをいぶかりつゝあつた時次ぎの如き深遠な返答を得たと傳へられる。

「われは眞理を愛するが故に謙遜を愛す。」

諸子よ、諸子も主イエズスと共に眞理を——即ち己れの虚無と惨めさを愛されよ。然らばま

ことの聖なる自由が諸子に與へられるであらう。

正當なる長上の命令に對して世俗的な獨立の態度を採ることが優越性を示すことであらうか。かくの如く考ふる人々の迷妄こそ憐れむべきである。年輩の如何を問はず、自己心内の光明を過信し、我等を指導の責任にあり、地位にあり、且然るが故にその地位に應はしき聖寵を與へられてゐる人々の判断を疑ふことは、何たる誤謬、何たる危険であらう！ 我意我執を斷ち切つて、眞の服従に活き、與へられたる本務に従つて神に忠實に盡した聖者こそ眞の自由人であつた。多くの聖職者が自愛心に釣られて陥つた種々の危険や（ある場合には善意であつたとは云へ）、重大な錯誤から彼等聖者は完全に守られてゐたのである。

諸君は押されて廻る車輪の様に、機械的ではなく、衷心の確信に基いて、眞に服従することを學ばねばならない。神學校にゐる時から、たとへば規則を忠實に守ることによつて、自己の執着を矯める習慣を作らるゝがよい。勿論それは決して兵營生活の眞似をせよと謂ふのではない。主に對する深き愛と謙遜に基く超自然的精神の流露としてであらねばならぬ。

特にも命令が諸君の嗜好に抗ふ時に服従の稽古をせらるゝがよい。如何に苦しくとも、辛くとも、勇氣を奮ひ起して、我等のために茨の冠せられし崇むべき主の御姿を思ひ浮べて、「死に至る迄従順なりし」我等の神にして審判者なるイエズスを思ひつゝ、心残りなくこの従順の行爲を遂行せねばならぬ。

もしも諸君が現在も將來も眞に従順であるならば、私は諸君の行末に對しては何等の危惧の念をも懐かぬであらう。「従順の人、勝利を語らん」と録されてある。

己れの傲慢を抑へてこれを征服する第二の有効なる手段は、恥辱を甘受してこれを味ふことである。主は日々このよき贈物を何人にも恵み給ふであらう。而して誠にかゝる機會の少なからぬ我等こそ幸福ではなからうか。

實際これを諸君に教へてくれるのは、謙遜を論ずる立派な書物ではなく、日常の實行である。丁度外國語の會話が會話し乍ら學ばれる様に、謙遜は自らへり下ることによつてのみ學

ばれるのである。

であるから、不可謬でない長上者や、氣むづかしい朋輩等の輕蔑や、誤つた言葉や、身振りや、場合によつては過度の叱責をすら……喜んで受容れる勇氣をも養はねばならぬ。ヘロデ王の面前に於けるイエズスの如く、かゝる際には沈黙する力を養へ。……「されどイエズスは黙しぬ給へり。」

もしも諸君が心を披いて諸君の家族の人達の改心のため、或は主の聖心に對する愛の印として、或はその御榮えのためにより高き徳を修め、自らを聖成せんがために如何なる苦業なり、償罪の業なりをすゝめるかを私に親しく相談されたとしたら、私は何等躊躇することなくかく答へるであらう。「自らへり下る機會を避くることなく、勇ましくそのすべてを受容れよ。諸君にして更に勇氣あらば、進んで恥辱を求められよ」とさへ云ふであらう。

これこそ一切の迷ひから解放された、さうして誰れしもの手の届く處にある苦業である。四旬節の間にもそのあとでも、いつもこの荒衣を身に纏ふ様にせられよ。たとへば大祝日や

月の始めの金曜日に償罪の精神を以て聖心や聖母の御榮えのために屈辱の寶を獻げることが、最望ましきことで、これによつて諸子は主とその聖母の心を奪ふことができよう。

長上から厳しく罰せられて、朋輩の前で赤面する如き機會を自ら求めてゐたあの可愛らしい八歳の子供の感嘆すべき言葉を想起しようではないか。

「神父様、先生には必ず黙つてゐて下さい。皆が僕がほんとうに悪かつたと思ふ様にね。恥ぢと苦しみは僕が頂いて、愛はイエズス様に獻げるんですからね。」

犠牲的精神

更にまた、司祭は、單なる一キリスト信者たるに止らず、キリストの一代表者である。従つて彼には忠實なる僕に要求さるゝ以上のことが要求される。彼は十字架に釘けられたる主の親友である。彼は普通の信者以上に其崇むべき主の御心を解し、其思召と一致すべきである。司祭が、神の子が、それを求めて地上に天降り給ひ、人間の救ひに其聖心を傾けて抱き

給へる十字架——その十字架を熱愛すべきは當然である。

この十字架の學問、即ち犠牲を愛する精神は大部分神學校時代に涵養せられねばならぬ。これこそシセロの如き流暢なるラテン語を習得するよりも困難であり、諸君の側に於ける奉仕的熱心と、指導者の同等な誠意が絶對的に必要であり、この素地の上に聖寵が働いて始めて完成せらるゝものである。

遂行に困難な、つらい本務に直面したときに、必要以上に恐怖心に襲はれぬ用意に、今日から克己の訓練を開始せねばならない。私は更に一步を進めて、假令嚴密な意味での義務でなくとも、自發的に不愉快な地位を選んで、これに甘んずる位な勇氣を持ってよと勸告する。病氣とか、手術とか、反對とか、失敗とかの前に戦慄する様では駄目である。たとへば充分健康に注意するのはよいとして、寒暑疲労に對して贅澤などは云はぬがよい。よろしく道徳的に丈夫で、靈的に勇敢であるべきである。進んで戦ひを求めざる迄も、過度に恐るゝ要はない。寧ろ辛苦困難を愛して、徳のための聖戰を敢てせよ。

かくの如く磔けられた主イエズスの麾下に應はしき軍律に服して、自らを訓練するに従つて、努力や犠牲は漸次容易になり、遂には十字架を好愛するにすら至るべきは、余が確言して憚らざる所である。かゝる精神を有せざる司祭は眞にキリストの代表者たる資格はない。

磔けられた神の子と、其十字架とが分割し得るものゝ如くに考へるなどは以ての外の間違ひである。それが凡てのキリスト信者に對しても眞理である。況んや司祭たり、使徒たる者の上に於てをやである。

十字架を愛せんと努め、眞にこれを愛する人こそ磔けられし救世主の眞の友たり得るものである。

私は繰返して云ふ。この司祭的勇猛心と犠牲的精神の獲得は神學校時代になし遂げられねばならぬことを。學生としての今日に於て心残りなき自己放棄と奉仕によつて基礎を置かれねばならぬ事を。即ち日毎時毎の克己——義務を忠實に盡すこと、時間の嚴守、神の聖旨に

服従せる勉強、忍耐、柔和、親切等の朋輩間に於ける愛徳の實行等、瑣細な規則の遵守に全心の飛躍をこめて、生活全體の犠牲化を計る事である。これすらが行ひ得ないで、將來の殉教者たらんなどの空想など、假りにも描くが如きは笑止千萬である。

序に殉教夢想病者の面白い一挿話を紹介しておかう。話の主人公は自己の意に反して教鞭を取るべく餘儀なくさせられた一青年司祭であるが、長上の命に従ひ、彼がその學校で忠實に勤めたならば、學生によき感化を興へ得たであらうことは萬人の疑はぬ處であつたにも關らず、本人は飽く迄もアフリカ傳道の召命をうけたと主張してやまなかつた。散々駄々をこね、最上者も業を煮やして遂に希望に許可を興へた。彼は意氣揚々と將來人喰人種の餌食となつて、潔く殉教すると號して出立した迄はよかつたが、しばらく経つと彼は兜を脱いで本國歸還を哀願して來た。其理由は？彼は大の喫煙家で、しかもいゝ煙草を好愛してゐた。アフリカ内地ではそれが手に入らぬといふので彼は絶望の淵に沈んで遂に悲鳴をあげた。アフリカによい煙草がないので、悲しくも殉教の光榮から落伍した彼を諸君は笑ふであらう。併

し乍ら、これは笑ひの喜劇ではなくて、實は悲劇だったのである。

ある教皇の言として次ぎのことが傳へられてゐる。「奇蹟などは一つも行はずとも、若しも戒律を忠實に守つた確證ある修道士があるならば、余は直に彼を聖人の列に加へる。私は諸君に告げたい。克己の精神の精華たる「日常本務の遂行」に勇敢にして忠實なることの苦業によつて、品級の祕蹟をうくる用意をせられよ。然らば初ミサの日に主は諸君をその眞の友と呼び給ふであらうと。

信、頼

如何にしてイエズスの聖心に對する愛を立證すべきかとの質問に對して、私はいつも必ず次ぎの如く答へる。「この愛は四の缺くべからざる要素——即ち信、頼と犠、牲と聖、體愛と傳、道心から成つて居る」と。

併しながら私が信、頼を第一位に置く事に諸君の注意を催したい。なぜなれば信、頼なくして

は主の聖心に近くことは不可能であり、また主と疎隔してゐては——主はこの他人行儀を嫌ひ給ふ——犠、牲の勇氣や聖體に對する熱心を祈り求めることが出来る筈はない。況んや燃ゆるが如き傳道的精神をやである。これ實に主の御胸の上にわれらの小き心を倚らしむることを許されてのみ、よく燃しうる炎である。

イエズスを深く識るがためには、又主御自らによつて如何に御思召通りに主を愛し奉るべきかを教へらるゝが爲めには、また我等に對する主の御希望や御計畫を悟るが爲めには、聖ヨハネの如く、また凡ての聖者の如くに其聖心を求めて眞の子供らしく、又友らしく御側近く寄らせて戴くことが第一の條件である。さらば信、頼の心こそ眞剣な靈的修養の根柢をなすものであることを悟るであらう。

信、頼は、この故に主イエズスに對しまつる我等の心の最初の、且最も自然な躍動であつて、それは同時にわれらの愛の第一の證據であり、且つ獻、げ物である。凡ての高貴なる友情や親密なる家庭の愛に於けると同様に、愛と信、頼とは不可離不可分のものである。愛の深さは信

頼の程度によつて測られ、愛する者を信頼する程度に己れの心をこれに任せるものである。口先では愛すると言ひ乍ら、心内に一種の疑いと距離とを保つならば、それは愛心の徹底なきを表はす證據ではあるまいか。

然らば、諸子は心狭くして徳をば不愉快なものにする冷淡な消極的態度をば、自らに於ても、又諸君が指導するであらう靈魂からにも極力排斥しなければならぬ。私の衷心よりの願は諸君が斷じて失望落膽したり、意氣沮喪しないことである。救主、あはれみ深き聖心を最も傷け奉る處の信頼を缺くといふ罪に陥らざらん事である。就中この信頼と平和の缺如には殆んど例外なく、かくれた傲慢、微妙な自愛心の罪が伴つてゐることを忘れてはならぬ。信頼と謙遜とは離すことのできない二つの徳であつて、常に互に相伴ふものなのである。

勿論正直に自分のあらゆるみじめさと、缺點や罪などを認むるはよい。それは素より爲すべき事で、何等の差支はないが、如何なる場合に於ても、失望するの權利は與へられない。我等が如何に大罪人であらうと、それが爲めに主イエズスには寸毫の變化もあり得ないから

である。即ち主はいつも迷へる羊の後を追ふ善牧者であり、路傍に傷いて横はる旅人をいたはる善きサマリア人である。彼は天國の天使の爲に天降り給うた救主ではなかつた。いやされて聖ならんが爲に戦ふ此世の弱き病める者に憐れみの聖手を差延べ給ふ方なのである。

「汝がわれ主の愛に信頼すと云ふ時、汝はわが心を奪ふ」と或る聖人に主は仰せ給うた。それは諸子に就ても同じ事で、諸子もこの美しき心の叫び、特にその信頼の業を以て無限の憐みの宿れる其聖心を奪ふ様つとむるがよい。

是は熱心なる時に於て勿論さうである。が心に潤ひなく、將に失望の淵に陥らんとする時何等かの弱點に悩むとき、或は重ねて罪に陥つた場合にかくせねばならない。信頼こそは弱きもの、恢復期に臨める者の力である。私は屢かく云ふのをきいた。「自分が小さきテレジアの如き者であつたら、信頼もできようが……」と。併しそれこそ非常な考へ違ひであつて、小さきテレジアは却つて其正反對を云つたのである。「假令自分がマグダレナ以上に罪深くあらうとも、自分は信頼を以て主の憐み深き聖心のうちにわが身を投じよう」と。

この聖女の如き聖なる大膽、動かし難き信頼を有しない者に、どうして彼女の如き聖成の業と傳道事業とが期待し得られよう。諸君は特別にも彼女に倣つてこの深き教訓のこもれる温情の道に精進しなければならぬ。かくてこそ山をも動かすことができるのである。

あゝ我等の弱さとみじめさの如き宏大無邊の信頼、能ふべくんばイエズスの聖心の御憐みの無限なるが如くに、無限の信頼を以て主に對することこそ、まことの道である。「主よ、われ汝に希望し、いやが上にも希望せり。さればとこしへに辱めらるゝ事なし。われ誰に依り頼みしかを知れり！」

熱心と發奮

親愛なる神學生諸君、諸君が今日既に、日本のキリスト教的將來を双肩に擔へることを、屢々聖櫃の前に於て沈思默考せられん事を望む。之は大なる光榮である。而して又何たる重責、何たる大任であらう！こゝ數年を出でずして、極東に於ける主の葡萄園の働き手となる

のである。諸君がこの崇高なる召命に忠實である程度に従つて、收穫の多寡はきまるのではないか。

樹木の勢ひは其樹液の強弱により、果實の如何もそれに比例する。余は重ねて云ふ、何たる光榮且責任であらう。日本全國の神學生諸君よ、この諸君の双肩にかゝる大任命をゆめ忘れ給ふな。今日から、慎重に、細心に、——明日をまつことなく、既に神學校に於て——其準備を始められよ。然り、諸君は最早既に使徒として召されたのである！

余は既に幾度も幾度も、かの最も根本的な聖母マリアの傳道的精神に就て説教した。かの深き内的生活に由る祈りと愛と犠牲とに基く傳道に就て。これなくしては説教も活動も瞬間的に消え去る雷光、餘韻なき音楽、實りなき騷擾に過ぎない。

聖なる童貞女の麗しき稱號たる「使徒の元后」といふ言葉の意味に就て屢々默想せられよ。聖マリアこそはげにも使徒の元后であり、十二使徒以上の使徒である。外的活動に由らず、唯イエズスに充ち滿てる心の流露によつて、聖母が祈り、苦しみ、愛し給うた時に、數限り

なき靈魂に其御子を與へ給うたのである。これこそ今日は神學校に於て、明日は聖役に於て、諸子のための眞の傳道の龜鑑たるべきである。

主の賢くも奇しき御攝理は、この末の世に當つて、この傳道法の偉大なる超自然的力をリジュの聖女小さきテレジアの驚くべき働きによつて我等に訓へ給うた。彼女の如く、其跡に倣つて、我等は日毎の勉強と遊戯と、祈禱と犠牲と、就中、ミサ聖祭と、熱心なる聖體拜領とを、一言で云へば全生活を、愛する我等の日本にキリストの御國を齎らさんために捧ぐべきである。

神學校に於ける靈的生活が、諸君をして他の靈魂を淳化せしめて、之を救ふべき使徒に作り上げしむべきことを思うて、いよいよ熱心に心燃ゆべきである。聖母の如く、リジュの聖女の如き使徒たらんがために、今日より始むべきである。決して決して徒らに司祭たるの日を待ち乍ら、徒手傍觀すべきではない。正直で、有徳で、伶俐な日本人は、洗禮を希望し、これを受くべき聖寵を與へらるゝ様今日既に諸君から大なる靈的施與を、諸君の心の炎の決

定的犠牲を期待して居る。

かくして熱心な神學生は、自ら己れの道を豫め準備することによつて將來の司祭の先驅者たり得るのである。否、先驅者と云ふ計りでは足りない。既に最早、種子を蒔きつゝある人である。明日は一司祭として、其神學校での哲學や、神學生としての克己の業によつて自ら蒔いた果實を刈入れるであらう。彼の熱心は司祭職の聖役に先つて、最早、傳道に働いたのである。諸君が最初のミサを捧ぐるがために祭壇に立つであらうその光榮の日に、神の御前には最早數年間の神學校生活によつて行はれた、秘められたる傳道の成果たる、改心せしめられた人々——そのある者の改心は或は死の最後の瞬間に於てですらあつたとしても——の祈りと祝福とが供へられてあらう。

かくの如き意味での既に神學生時代から行はれた傳道は、このほかにも諸君にとつて測り知られぬ利益、即ち叙品されて後司祭となつても、この祈りと犠牲の精神と、燃ゆる熱心とが缺く可らざるものであるとの大眞理が、不朽のものとして諸君の胸底に刻み込まれるとい

ふ利益がある。之に由つて、この内的生活に依る傳道が一時的のもので、やがては説教と活動とを以てこれに替へるべきであるなどといふ迷妄から救はれるであらうから。

この傳道が既に神學生にとつて必要であり、不思議な成功の祕訣であるとしたら、司祭にとつては更に幾層倍か必要缺くべからざるものであるのは勿論である。この精神はリジユのテレジアに必要であつたが、聖フランシスコ・サベリオにとつては更に幾層倍も必要であつたのである。

わが心より愛する神學生諸子よ。諸君にこそ日本の教會の將來と希望とが存するが故に、すべての司教の眼が諸君の上に注がれてゐることを片時も忘れてはならぬ。諸君の上に向けられたるこの大なる期待を裏切らざらんことを祈る！

日本の最初の邦人司祭は、諸君の如く完備せる神學校教育の恩恵に浴することが出来なかつた。それが爲めに非常な苦心を嘗め、功德を積んだに相違ない。余は日本の各地を説教して歩いた間に、迫害のために身をかくして昔日のカタコンブ時代の教會に於けるが如く、ひ

そかに勉學し、叙品を受くるが爲めには遠く國外に逃れて始めて目的を達したが如き感動すべき閱歷ある人物と會見するの光榮を有した。これに較ぶれば、實に恵まれたる境遇にある諸子は、斷じて忘恩者となつてはならぬ。諸子の上にいやが上にも豊に降された恩寵を空しくし給ふな。マリアの如くに祈と勞苦によつて、明日司牧すべき靈魂の上に注ぐべきこの恩寵を熱心と犠牲に由つて、又十二使徒の如く、今日神學校に於て諸子の心の聖盃にあふるゝ迄にみたさるゝ事をせよ。

これらの堅實な教訓を心に解して實行する者は永遠の生命に至るべき豊なる果實を結ぶであらう！



星の暁

六 聖母と司祭

若しも司祭がキリストの身代りであるならば、マリアは特別な意味に於て、司祭の母である。司祭も亦當然聖母に對して普通の信者よりも遙に勝れた孝愛の情を獻ぐべきである。

イエズスが御臨終に際して、其忠實なる友、最愛の弟子なる聖ヨハネに宣へる「汝の母こゝにあり」との御言葉は、彼によつて代表された司祭に最深き意味で當籤る言葉である。わが親愛なる神學生諸子よ、この麗しく高貴なる信心を養ひ、之をやさしく強きものたらしむる様心掛けられよ。而してその信心をして實行的なものたらしめんが爲めに、聖母に倣ふことによつて諸子の愛を示せ。かくて始めて諸子の聖母への信心は眞に司祭的なる信心と呼べるゝに値しよう。

この點に關して、余は聖母の三の特權に就て諸子の注意を喚起して置きたい。この特權は私をして云はしむれば、最も美しきものであり、常に私に深き感銘と教訓とる與ふるものである。今こゝに諸君と共にそれに就て默想を試みよう。

(一) 第一は聖母が淨き愛の母——御自ら無限の愛其ものにて在すイエズス・キリストの愛の母にてゐますことである。この感嘆すべき御母に、學識中の學識、凡ての聖者がそれによつて聖者となつた處の學識、「キリストの愛を學ぶ知識」を祈り求められよ。

彼女の御手によつて、まことの至聖所たる其御子イエズスの聖心の扉の諸君に開かれむことを！ 神の愛のいかなるものたるかを悟らしめんがために、諸子が御母に導かれてこの神殿の奥深く進み入らんことを！ あゝわれらの救主の愛、この深き神祕が造られし者によつて解し得らるる限り、諸君が悟り得んことを！

天國に入るに先立つて、御託身、十字架、聖體といふ愛の極致のいかばかりなるかを示し

これを黙想し、味ひ、且わが身に活かすことを教へらるゝ様聖母に祈り求めよ。諸子の洗禮はこの狂へるが如き愛の賜物であり、明日與へらるゝであらう司祭職も亦そこから流れ出たものではないか。而してキリスト教の一切の奥義は、愛なる神の哀憐を知る知識によつてのみ説明し得らるゝのである。諸子よ、ゆめ忘れ給ふな。

淨き愛の母がこれらの玄義に就て強き光明を諸君の心に與へ給はんことを！

(二) 聖マリアの最も暗示にとめる特權は、聖母が、聖母のみが「汚れなき御やどり」たることである。ル、ドの出現に於て聖ベルナデットが「貴女の御名は」と尋ねた時、「われは汚れ無きやどりなり」と答へ給うた程、これは聖母特有の光榮なのである。

この聖母の特權はわれらに完全なる思惟と精神との潔白といふ最も嚴肅なる教訓を垂るゝものである。マリアの特に恵まれた子、將來キリストの身代りたるべき諸君は、特別に清淨無垢でなければならぬ。

諸君の讀物、友交、會話等に於て心の鏡を曇らす様な一切のものを遠く遠く投げ捨てよ。常に汚れのみならず、危険なる機會、否たゞ然か見ゆるに過ぎざる處のものすらも之を遠ざけねばならぬ。なぜならば「司祭は極めて貞潔且清淨であるのみならず、またかく見えねばならぬ」からである。司祭にして然りとせば、況んや神學生に於てをやである。

この潔白に關して、實生活の上に非常に重要な一點を強調して置かねばならぬ。それは眞に承諾された小罪の習慣に對して戰ふことである。

小罪だから大したことはない、看過し得べき、結果のない惡であると思ふる人々——悲しいことには、この種の人々が無數にある——この人々の仲間入りをしてはいけない。小罪は斷じてそんなものではない！

大罪の深淵に陥らざらんがために、罪といふ一切の罪に對する深き嫌惡の心を養へ。徐々に小罪の習慣を蛇蝎視する大なる恩寵を與へらるゝ様、努力に努力を重ねるがよい。

この目的を達するためには、方法をたてた頻繁な告解ほど有效な道はない。こゝで諸君

は余が前述した悔悛の秘蹟の、測り知られぬ利益に就て想念を喚起する必要がある。この秘蹟に由つて、單に罪の赦のみならず、誘惑に打克ち、わけても天使的徳に對する道德的危機より脱出すべき助力の聖寵が與へられるのである。

希くは汚れなき童貞が清淨貞潔といふ雪白の百合の花を心に芽生へさせ、諸子の貴き召命を守り給はんことを！

(三) 最後に、諸子はマリアを「苦しみの母」として敬愛すべきである。犠牲的精神に就て前述のわが言葉を想起し、かゝる母の子として孝行を盡すの道は、其の御苦難と御犠牲との恩寵と光榮とを分つに在ることを悟らねばならぬ。諸君のために聖母が御生涯の涙と、自己放棄とによりて得給へるものに對し、諸君も亦克己と犠牲とを以て御恩返しする覺悟がなければならぬ。

聖母に對する眞率正銘な信心は、情弱な生活や、日毎の小さき十字架——それは自己の召命を理解した神學生にとつては恩寵として映すべき筈である——の逃避や、恐怖とは兩立しない。諸君の病氣、苦痛、逆境に際して、これらのものを信仰と平和の心を以て甘受し、「苦しみの母」の御前に捧げて孝心を證せよ。公教要理を教へるために勞苦し、親切を盡さねばならぬ時、聖役のために休息や休暇を犠牲にしたり、粗食に甘じたり、睡眠不足を忍ばねばならぬ時、「殉教者の元后」を想起して、其愛によつてこれらの困苦に打克て。司祭となり、傳道に従事するに及んで、神學校に於けるよりは幾度か頻繁になるべきである寒暑や疲勞、また避けがたき反對等をよろこび勇んで受容れよ。聖母に對する愛を示す多くの機會が與へらるゝこれらの時に、諸君は自ら之を幸福と思はねばならない。

苦しむことを知り、且苦しまんことを欲する者のみが眞に十字架に釘付けられたるイエズス・キリストと、殉教者の元后たる苦しみの御母とを愛し得るのである。

であるから御降誕、御告げ、被昇天、汚れなき御やどり等の聖母の感動すべき美しき祝日には、熱心を新にして、これらの意義を尊ぶ爲に、前晚より心をこめて準備し、二三の祈り

若くは犠牲を捧ぐるがよい。それから諸君自身のためにも將來の傳道の成功のためにも、毎日其日の玄義を默想し乍ら聖職者と使徒の元後の榮えのために、ロザリオを唱へることを忘れてはならぬ。默想の間などには、ロザリオの十五玄義を全部唱へるがよい。私はこの信心が必ずや諸君に幸福を齎すであらうことを確言する。

今日も明日も、將來末ながく諸君は天の御母の愛子たれ。また熱心なる使徒であれ。イエズスは諸君を彼女の御手に任せ給うた。諸君にも亦主イエズスより御母の榮えが任されてゐるのである！

七 司祭の至上愛

我らは聖靈の心の衷に語り給ふまゝに、己れの愛好する特別の信心を持ち得る者である。素よりこれ、正當なる事であり、靈的生活に於ても個性は尊重せられねばならないからである。併し乍ら、諸君の信心はいつも教義の上に基礎づけられた強固なもので、單なる美しき感情、ましてや宗教的夢想であつてはならぬ。靈的成育に役立つ滋養に充つる糧であり、強壯劑であらねばならない。

私の知るある種の神學生は机の上に聖者の畫を三つも四つも飾つて、其前に蠟燭だの、造花だのを供へてゐた。併し乍ら聖體に對する信心はなく、聖體拜領を怠ることは餘り意に介

せず 不従順で克己心に乏しかつた。こんな人達をゆめ眞似てはいけない。それは悪趣味の美食家が、自分勝手な料理をする様なもので、決して滋養になるものではない。諸君はかゝる邪道を避けて、靈的生活を教理の堅き地盤の上に築き、眞理の糧と強き愛徳とを以て精神を養ひ、靈魂を健全に致さねばならぬ。

先づ、すべての眞にキリスト教的な生命の根源である聖三位一體に對する愛から考へ始めよう。

諸君の洗禮は、實に父と子と聖靈の御名に由つて施され、而うしてそれは又其御榮えのために諸君を神の子とせられたのであつた。諸君が司祭たる事も亦、地上に聖三位一體の支配を樹立せんがためなのである。祕蹟と祈りによつて與へられる聖寵と祝福とは、すべてイエズスによつてこの聖三位の永遠無窮の生命の泉から汲まれるものであつて、將來諸君に天國にての特別の榮えが與へられるであらう時にも、諸君は歡喜のうちに長しへに「父と子と

聖靈に御榮えあらんこと」を歌ふのである。

この玄義はすべてのキリスト教信仰の根柢をなすものである。隨つて、諸君が將來司牧者として信者にこの玄義の尊ぶべきことを教へる前に、先づ諸君自らこの神の内の生命の神祕に對する能ふ限り應はしき敬虔の念を養つてをかねばならない。

併しかく云へばとて、余は諸子に諸子のなし能はぬ様な高尚な祈りや、六ヶ敷き行事どもを要求するのではないから、諸君は安心するがよい。余の勧めるのは、例へば十字架の印を眞面目に敬虔にせよといつた様なやさしい事である。其際恭しく聖三位の御名を唱へ、深き信仰と愛の念慮を起すことである。

また同様な心構へで、心して榮誦を唱へる。聖務日課、其他の祈りの中に絶えず繰返さるゝ此の莊麗なる祈りを、ともすれば人は習慣に陥つて器械的に唱へがちであるからである。副助祭になつたならば信心深く聖務日課を唱へることによつて、聖會と共に聖三位一體を崇め奉ることを忘れるな。修院と全カトリック聖職者の「永久の讚美」たる聖務日課の精神

は、之を以て神に對する全教會の公的讚美として、全世界の創造主たる神、救主たる神、聖成者たる神の禮拜に與らしむるにある。であるから、格別にこゝでは器械的なお役目ふさぎな唱へ方を極力避ける様にしなければならない。

併し乍ら最も大切なのはミサ聖祭である。聖三位一體にふさはしき唯一の禮拜と讚美なるミサを、神學生時代から如上の精神で大切に拜聴すべきである。祭壇はよき司祭が地上より天に在す永遠の父の御許迄上り得る梯子である。

この玄義の深奥なる、最大の神學者に於てすら極めて特別の恩寵と光明と、非常なる愛の光なしには、現世に於ては味得し難き程のものである。しかも、これやその日に於て、我等が若し忠實であるならば、天に於て諸天使と共に、目のあたり見奉るべき所のものである。現世に於て聖三位を味得するに必要な光明と愛の炎とは、祭壇の上に在すイエズスの祈りに由つて、唯聖靈のみが我等に與へ給ふものなのである。

それ故に余の勧告に耳を傾くるがよい。聖者と使徒を造り給うた聖靈に特別な信心を持たねばならぬことを。實際、この聖靈に對する信心が、其當然占むべき名譽ある地位を占めることは、不幸にして餘りに稀である。この信心を求め愛し、愛を以て聖靈に祈る人は少い。その御名と存在を知る以外には、キリスト信者の靈的生活に占むる大なる其役割は、無知と無關心のために、全然顧られてゐない。

善良なる信者と呼べるゝ人々の間に於てすら、屢見出される神に關する事柄に就ての無理解、正直に云へば、以上の事實によつてその愚かさが説明せられようと云ふのである。凡そ神の事は、たゞ聖靈のみが與へ給ふ光明に由らずんば、悟りうる底のものではない。

其他我等の日常生活に絶えず繰返される大小無數の本能や、物慾との卑怯な妥協は、超自然的活力の不足、犠牲や克己の精神の力の缺如を示すもので、これらの病弊も亦、聖靈と靈魂との間に濃霧や積雲が蟠つてゐることを物語るものである。これらが雲散霧消せざる限り聖靈の光りと炎とは、其強き作用を我等の上に及ぼすことはできない。

これらの嘆かはしき怠りを償ふために、屢々大なる熱心を以て我等は聖靈に祈らねばならぬ。特に微妙なる良心問題の解決を欲するが如き場合、または困難なる傳道事業に着手せんとする際など、必ず「聖靈來り給へ」を唱へるがよい。

其他召命に關する決定的な回答を與へねばならぬ時、何れの道が主の御思召であり、其御榮えになるか明かでなく、不安に惱む時等々、黙想の間に自己の良心の缺點を悟り、それを矯正し、新に熱心にならうとする時、特に神の御前に約束した事柄の實行への勇氣を得んとする時、すべて之等の聖寵の祝福の日に當つて「聖靈來り給へ……かくて地の面は新にならん」を心から繰返し唱ふべきである。

聖靈降臨の大祝日に先立つ九日の祈りを、祝日のよき準備として、自らにも又信者にも熱心に行ふ様留意せらるべきである。

余が説教の前後に、必ず「聖靈來り給へ」を唱へさせたのは、余の拙き言葉を神の恩寵と聖靈の炎の、(云はゞ) 括弧の中に挟むためであつた。與へられたる重大な使命の遂行に當

つては、諸君も亦必ずや司祭的生活の全部に亘つて聖靈の御加護を求めんことを忘れ得ないであらう。かくして生涯の最も記念すべき叙品の日に、諸君の頭上に接手して司教のよび下した其賜物はいや増すであらう。

また、熱心なミサ聖祭執行も、徐々に諸君を天父と聖三位一體との親しき交りへ導くと同時に、聖靈も亦諸君自らにとつても、司牧する信者にとつても、最上無二の恩恵なる日毎のミサの云ひ盡しがたき神祕をば、彌深く悟り彌高く評價する光明を與へ給ふであらう。

前述の事柄をよみ終つて次章に移る前にも、聖靈の降臨をまちつゝ高間に於て祈禱し給ひし聖なる童貞と共に、暫時心を鎮めて「聖靈來り給へ……光明を點じ給へ……愛の火を燃し給へ……」と唱へられよ。

八 心の王、心の中心なるイエズスの聖心

マリアによりてイエズスへ、而してイエズスより其の聖心を通じて天父と聖三位一體へ、これが靈的生活の正道である。教皇レオ十三世が全世界を聖心に奉獻するに際して「われらの一切の希望そこにあり、人類の救ひは聖心に求められ、聖心に期待すべきである」と申されたその崇むべき愛の御心に就て今や語るべき順序となつた。

余は切に諸子が誤解せられざらん事を祈る。今こゝに述べんとする處が普通の意味に於ける所謂「信心」ではないといふ事である。最早、單に善良なる信心などと呼ぶことを斷じて許さない。堅固な教義的基礎に立てる、而して一切の信心の根本精神とも稱すべき事柄なのである。單なる信心ではなくて、深き生命、神的生命即ち神の愛、イエズスの無限のいつく

しみと憐みに關するものである。これ即ち教會が、その極めて嚴格なる公式典禮に於て使用する「聖心」といふ美しき表徴的文字の教義的、神學的意味にほかならない。

希くは「深き愛の母」が、神學生にとつてかくも麗しく有益であり、熱心なる司祭にとつても然かく必要な、且希望に充てる教へを、能ふべくんば聖ヨハネ、聖アウグスチノ、アシジの聖フランシスコ、聖ベルナルド、サレジオの聖フランシスコ、聖女ジェルトルド、聖女マルガリタ・マリア以上に諸君に悟らしめ給はんことを余は祈つてやまぬものである。

聖寵の泉なる御子の聖心たる「天の門」聖母マリアが諸君の爲に其扉を披き給うて、この至聖所、この聖櫃の奥深く導き入れ給ひ、聖マルガリタ・マリアの祝日に唱へらるゝ典禮的祈禱の用ふるかの莊重なる言葉、「イエズスの聖心の富」の意味を示しこれを諸君に托し給はんことを私はいのる。

さてこゝに所謂神の富とはそも如何なるものであらうか。それは酬いとして我等の全愛を求め給ふイエズスの愛、我等の絶對の信頼を要求するその無限のあはれみ、我等の側より

も犠牲を期待し給ふ主の救世的償罪の業、またわれらの熱心を刺戟し燃やしむる主の魂の救ひに對する熾烈なる渴望——その救ひのいかに高價なりしことよ！——我等の嚴肅なる愛の償罪を喚起するかの人々の忘恩によつて主の蒙り給ふ苦き杯である。

ベトレヘムに於て、ナザレトに於て、其公生涯を通じて、ゲツセマニの園、カルワリヲの丘に於て其御涙と御血と、御奇蹟と御言葉によつて、主は何を説き、何を我らに提供し給うたのであつたらうか。それは愛、而して愛のみではなかつたか。即ち其聖心を我等に賜うたのではなかつたか。

またパレー・ル・モニアルに於て聖女マルガリタ・マリアに與へられた四十度以上の啓示に於て主は何を物語り給うたか。

勿論主は既に福音書にのせられてある御説教や御要求の一點一劃をも變更せられたのではない。併し乍ら我等が、主の親友として許された者すらが、忘れてしまつた所のものを再び再認し、再證し給はんが爲めに來り給うたにほかならない。主がわれらの愛に渴き、これを

求め給ふことよ！

イエズスの聖心の、眞に神的な正銘な大啓示は福音そのものであり、余の諸君に説かんとすることもそれに他ならない。併し乍ら、教會が既に汚れなき聖母マリアに就て公式に宣言したことを異常な方法で再認する手段としてベルナデットが選ばれた如くに、——ル、ドの出來事は教皇ピオ九世の言葉の天來の承認として實に美しくも奇しき價值がある——聖女マルガリタ・マリアの啓示も亦一方教義的には福音に何等の新しきものを加へないと同時に他方驚くべき事實によつて、福音に含まれた神の愛の啓示と、愛徳の教訓とを再認してゐるのである。この私的啓示は、最古く且最本質的な福音的肯定、即ち全愛なる神と、全哀憐なる救主が、常に我等が彼を信仰するに止らず、更に信仰する彼を愛することを絶対に要求し給ふといふ教へを、超自然的の證印によつて、正銘間違ひなきものとして顯示した。正にその故に一層吾人の嘆美に値するものなのである。

諸子が忘れてならぬ事は、信じてしかも愛せざることができるといふ不幸な事實である。

信徳と愛徳とは相伴ふべくしてしかも必ずしも同一ではないのである。悲しい事には天父の我等に遺し給へる者を信じ乍ら、主イエズスを愛しないか、或は愛すること甚だ稀薄なる者がキリスト信者の間に多いのである。

偉大なる使徒聖パウロはこの事を稀れに見る雄辯を以て物語つてゐる。「山を移すほどの信仰ありとも……愛なくば聊もわれに益あることなし」と。

それであるから將來諸君が公教要理を教へたり、説教をしたりする際に、洗禮志願者にも信者にも、大なる信仰と共に大なる愛をも教ふことが非常に肝要である。この人々が活々とした信仰を持つ爲に、愛の知識を彼等が持つことは絶対に必要である。これこそキリスト教的掟の完成である。「愛は律法の完成である」と聖パウロは録してゐる。

更に最近に至つて聖女マルガリタ・マリアの後を承けてもう一人の使者が、余が繰返し繰返し諸君に説いた神の愛の教訓を其全世界に亙る奇蹟によつて最雄辯に説教しつゝある。幼きイエズスの聖テレジアはまことに教皇ピウス十一世の言葉通り「神の聲」であつて、其聲

は福音に述べられたことを繰返し聲明し、また聖女マルガリタ・マリアが世人に傳へたイエズスの人々によつて熱愛せられんことを欲し給ふ強き御思召を證明してゐる。このリジユの愛すべき聖女の身邊に數限りなく起つた奇蹟は、シナイ山の雷鳴の如くに神が彼女によつて語り給ひ、再び繰返して第一にして最大なる掟を宣布し給ふことを示すものである。曰く、「汝の心を盡し、意を盡し、精神を盡し、主なる汝の神を愛すべし」と。一切のキリスト教的掟が結局この一の最大なる掟に歸し、第二の掟たる隣人愛は第一の上に基づいて人が眞に神とイエズスとを愛する限りに於て効果的であることは、救主御自らの宣うた處である。

かの偉大なる樞機官ビー閣下の次の言葉も同じ事を意味する。「余は定理神學の全部をばこの一語を以て總括する。曰く、神われを愛し給へり。而して倫理神學全體は第二の言葉につきる。曰く汝愛せよ。」實に衷心よりイエズス・キリストを愛することを知らぬものは「掟を全うした」のである！

次に、今日迄御子が神より與へられた凡ての賜物も、將來は天國で與へらるゝであらう一切の幸福も、悉く救主なる神の愛の賜物、即ち其聖心の恩恵たるに外ならぬことに注意せらるゝがよい。諸子が神によつて造られ、また其十字架によつて贖はれたのは愛故であり、

また永遠に諸子の創造主たり救主たる神を愛し得んがために外ならない。

神の御獨子が其御父にしてまた諸君の父たる神を啓示し給うたのは……たゞ愛故であつた！

主イエズスが御昇天の後に聖靈を遣はし給うたのも……これも亦唯愛の業であつた！

御自ら御托身遊ばされ、己れを死に、十字架に交付し給うたのも……たゞ愛故であつた！

聖木曜日以來主が我等の犠牲、父の前に於ける代禱者、我等の地上逐謫の伴侶として祭壇上の聖櫃の内なる聖體として臨在し給ふのも、畢竟亦唯愛故であり、この愛への酬いとして、

最正當なる聖心への捧物として我等の心を求め給はんためのものである。

「わが子よ、汝の心をわれに任せよ……。」

「あゝかくも我等を愛し給ふ主を、誰か愛を以て酬いさるべき……。」

十字架に釘付けられ給へるイエズスを仰げ。御頭には茨の冠が被らされてある。……唯愛故に、而して諸子がこの愛に酬い奉らんがために！

其御手と御足とは釘にて貫かれてある。それも唯愛ゆゑに、而して諸子はその愛に酬い奉らんがために！

御顔血に塗れ、御唇かはく。唯愛ゆゑに、而して諸子はその愛に報い奉らんがために！

御脇腹は槍で披かれてある。其愛によつて傷ける御心を示し、諸子が其聖心を愛し残りなく諸子の心を捧ぐる様求め給ふのである。

將來の天國すら、神がその愛し給ふ子等に、無限の愛を注ぎ給ふそのこと以外の何物でもない。かくて諸子も長しへに諸子の全心をこの愛に捧げるであらう。かく觀じ來れば、永生は實の所、これイエズスの聖心の終ることなき祝日ではあるまいか。

余は次ぎの如く約説する。イエズスの聖心の教義的意義とは、御托身、十字架、御聖體の秘蹟等……によつて示顯せられた神とイエズス・キリストの愛の謂ひに外ならぬ。而してこの愛は其酬いとして此世に於ても永生に於ても、我等の残りなき愛を要求する。イエズス宜はく「人若し我を愛せば……我父は彼を愛し給ひ、我等は彼に至りて其内に住まはん」汝等我が愛に居れ！」

余がこゝに述べたことの一切は、福音の啓示に含まれて居る。余は重ねて強調しておく。一切は本質的に福音のうちに存することを。

併し、イエズスの聖心の聖マルガリタ・マリアへの出現と御要求との中に一の新しい、そして吾人の關心に價する點がある。是れは單なる典禮的外形に關するものではあるが、イエズス御自身によりても要求せられ、且聖會によつて、常に認可されたのみならず、大に獎勵

せられてゐる所の信心である。

以下この聖心に對する信心の勤行に就て語らう。

主の愛に對する愛の獻物として、より精確にイエズスの聖女マルガリタ・マリアへの御言葉をかりて云ふならば、「彼の聖心に對する愛と償業の獻物として」主は特に四個條の嚴肅且明白なる要求をせられ、これを實行する人々に立派なる御約束と酬いとを附加し給うた。

第一にイエズスは毎月最初の金曜日の償罪のための聖體拜領を求め給ふ。

第二にイエズスはゲツセマニの園にて死ぬるばかりに苦しみ給ひし其み苦しみに對して、聖心を慰め奉らんがために悔悛と償ひの精神を以て、聖なる一時間を獻ぐる様求め給ふ。

第三に聖心の特別の祝日が制定せらるゝ事、其期日は聖體の祝日の八日目の次ぎの金曜日たるべきこと、及び其祝日が人々の忘恩、特に聖體に對する忘恩の嚴肅なる償罪の禮拜形式をとるべきことを御自ら指定し給うた。

最後に主の無限の愛のかたどりたる聖心の畫が到る處に掲げられ、尊敬せらるゝ様求め給

うた。

この聖心の信心の外的典禮は、救主のあはれみ深き愛の否定者、且冒瀆者としてロマ教座より宣告され、排斥せられたシャン派の人々によつて非常に反對せられしにも關らず、徐々に教會内に普及するに至つた。

聖會は聖靈に導かれて其後この信心と其新らしき外的典禮とを認可したのみならず、更にこれを祝福し獎勵するに至つた。特に教皇ピオ九世、レオ十三世、ピオ十世、ベネチクト十五世、また最近に至つて現教皇ピオ十一世が聖心に榮光を歸し、其社會的支配を弘むるに盡した事蹟は明白に今日教會の意志の奈邊に存するかを表示するものである。教會と精神を共にする司祭は幸である。

余は諸君が此點を充分理解せられんことを希望する。神の諸の恩恵を感謝し、己れの罪を償ふために、イエズスの無限の愛に諸君も熱烈なる愛を以て酬い奉るといふのが、この偉大なる教義の精髓であり、やがて又すべての聖なる司祭、凡ての使徒の精神、其心に燃ゆる神

の炎でなければならぬ。この全心をあげて主を愛し奉るといふことは種々ある信心のうちの一の信心ではなくて、實に靈魂の生命なのである。これこそは我等の義務中の第一にして最大なるものである。「すべての心の王にして中心なる聖心」といふことの意味は正にそれである。

この精神の表現としての外部にあらはれる信心に、典禮的禮拜がある。教會の趣意によつても、又余の體驗よりしても、極めて美しく且賞讃すべきこの典禮は、救主の御希望の實現であつて、それを實行する信者にとつて豊なる聖寵の源泉である。それであるから余は切に諸君がイエズスの聖心の弟子、その親しき友、また使徒であらるゝ様推奨してやまない。

諸君が聖ヨハネの如く特に弟子、使徒として聖心に獻身する決心をせねばならぬ理由は主の御約束の中でも次ぎの二ヶ條である。

第一 イエズスは特に其友を聖なるものとなし給ふ旨御約束せられた。こは特別に聖心に獻身せる司祭等にあてはまる。

第二は、最も頑固なる心をも感動せしめ、改心せしむる特別の才能を賜ふと宣うた事である。これ實に宣教師にとつては大に必要な靈妙なる賜物ではあるまいか……。

諸君が余の言を聽いて實行せられたならば、他日必ずサマリアの住民が主のことを告げた女に云つた言葉を繰返さるゝに相違ない。「我等最早汝の語る所によりて信する者に非ず。即ち自ら彼にきゝて其眞に救世主たる事を知れり」と。

聖マルガリタ・マリアと共に屢々この美しき射禱を繰返されよ。「希くはイエズスの聖心を自らも愛し、人々にも深く愛せしむるを得しめ給へ。然らばわが願ひは足れり」と。

イエズスの聖心、汝の支配のわが中に格らんことを、またわれによりて格らんことを！

イエズスの聖心へ獻身の祈り

崇むべきイエズスの聖心、主が聖マルガリタ・マリアに求め給ひし御思召に従ひ、聖職者と使徒の元后なる御手によりてわが靈的生活と傳道生活のすべてを残りなく主に獻げ

奉る。かくてわれは主の御忠實に訴へて、主がわが心の裡に二つの大なる御約束を實現し給はん事を冀ひ奉る。主は其友を聖なるものとならしめんと宣ひしにより、將來司祭たるべき我にもしかなして、主の御榮えのために益あるものとならしめ給へ。

イエズスの聖心よ、先づわが心の裡に汝の眞理と正義と愛との支配を確立し給へ。次に希くは御言葉の如く最も頑迷なる心をも動かす御約束の賜物を與へ給へ。

心を盡し靈を盡し、わが凡ての能力の限りをつくして汝を愛し、又人々をして汝を深く愛せしむるを得んが爲めに、イエズスの聖心よ、われ汝に切願す、我を受容れて、汝の脇腹の聖なる御傷の中にかくし、永生に至る迄汝の愛の炎に燃やされてそこに止るを得しめ給へ。……（毎月初金曜日の聖體拜領後これを唱ふべし。）

凡俗にして醜なる生活の危険より、イエズスの聖心よ、われらを救ひ給へ！（三唱）

九 司祭的聖徳と傳道的効果の源泉たる

ミサ聖祭に就て

わが親愛なる神學生諸子よ、余がこの靈的遺言の終篇として崇高なる聖祭を題目に撰んだのは、蓋し充分の考慮を経た決定に基くのであつて、其理山は宣教國に於ける司祭の二つの理想——聖者たり、且眞に傳道的効果をあげる使徒たること——をミサ以上によく要約してゐるものはないと思はれたからである。

余は此事に關しては心髓に徹する確信を有する者であつて、假令諸君が他日余の此れ以外のあらゆる勸告を忘れられようとも、聖なる祭壇に於ける諸君の聖役に關する余の教義と教訓をだに心の中に活々と保つならば、諸君は必ずや善良なる司祭且優秀なる使徒たることに

寸毫の疑ひもないと、余は敢て斷言し得るのである。

ミサが其全生活の最大關心事ではない模範的司祭なるものを余は未だ見たことがない。それと同時に締りのない平凡な司祭で、さうなつた發端がこの至聖なる神秘の毎日の執行に常に必要とされる祈りと熱心との心構へを失つて、不幸にもこの危険なる傾斜地をすべり始めに存せぬ例を聞かない。

この前置に心を留めた上に、以下を最大關心を以てよんで貰ひたい。同時に以下の重要な觀念がしみじみと諸子の心にしみこむ様、この一章を反覆精讀し默想しなければならぬ。

靈の世界は自然界より遙に調和と一致にとめる世界である。丁度太陽の周圍に幾多の天體がこれを中心として運行する様に、靈の世界でもすべての靈魂は中心たるイエズス、御聖體の裡に生きて臨在し給ふイエズスをめぐつて生きてゆく。凡ての靈魂にとつてさうであるとしたならば、司祭の心の中心がミサの聖なる犠牲に於ける仲介者であり捧げ物であるイエ

ズスであるのは猶更のことで、我等の司祭的生活の全部をあげて内的生活も傳道的外的生活も悉く聖杯カリスの周圍に廻轉しなければならぬ！

諸君が司祭である第一義は、決して説教したり、告解を聴いたりする事には存しない。それは神的の役目であるが故に感嘆に値するものには相違ないが、ミサ聖祭の日毎の執行には及ばないのである。ミサによつて司祭は永遠の天父に唯一の神に應はしき公式の禮拜、感謝償罪希願を捧げるのである。諸君の司祭職は祭壇上に始まり、祭壇の上に終る。何となれば他人の魂靈を救はんが爲めの司祭である以前に、我等は聖三位一體の光榮のための司祭であるからである。

天使と雖、諸君が聖祭を捧げらるゝ際に、諸君の手の間に在すイエズス・キリストが天父を祝しこれに榮光を歸し給ふが如くには神を讚美しこれに榮光を歸することはできぬと知るがよい。地上に於て玄妙なる聖三位一體に眞に應はしき唯一の禮拜、即ち無限の價値ある獻物はミサの犠牲であり、これが結局最上の、且日毎の聖三位一體の祝典なのである。

左様な譯であるから、司祭にとつては聖祭の執行の方が死者を蘇らしたり使徒等の爲した凡ての奇蹟を行ふよりも、何千萬倍も偉大なことで、最上最高の光榮なのである。司祭が朝毎に祭壇の上で、云はゞ、彼の主に命令を下すが如き、かの莊嚴な言葉を唱ふるとき、この聖なる職務の執行に比較しては、奇蹟を行ふ能力の如きは實に瑣々たる賜物にすぎないのである。

しかもミサの執行は司祭の最高にして最神聖なる光榮であるに止らず、實に彼の個人的聖成に對する最上の聖寵でもある。なぜなれば聖パウロの云へる如くふさはしからずして主の御血をのむものが其宣告を飲むに等しいとしたら、之に反して眞の熱心を以て聖爵を傾くる司祭は、聖徳と、萬華を咲かすべき聖寵の奔流を飲むと云つても過言ではないから。

まことにミサは聖務の最高なるものであり、然るが故に眞に彼の祭壇の偉大さを悟つた司祭にとつての、彼の聖成と「神化」との最上の手段である。それであるからカルチナル・ナルシエは眞面目に「キリストの化身」たらんことを努力しつゝミサを日常捧ぐる司祭は、單

に善良なる司祭として死するどころか、却つて聖者の列に加へ得る者となるであらうと常々申されてゐた。余は衷心よりこの言の眞理なるを信するものである。

併し乍ら、この言の實現は日毎の細心の準備と敬虔なる聖祭執行とを豫想する。必要なる心構へを缺くことによつて、この崇高なる聖寵の神秘も、部分的に効果を喪失するに至るのである。

諸君が司祭となつた暁には、この早朝の直接の準備をするために多くの事を犠牲にせねばなるまい。諸君はあまりにも通有な次ぎの良にかゝらぬ様心せねばならぬ。仕事が多いから黙想も祈りも心の落着きもなしに祭壇に上つても構はない……。この重大な錯誤の第一の悲しむべき結果は靈的貧血症である。即ち諸君の靈的生命を脅す一の危険である。更に疑ひもなく信者の靈魂は諸君の聖祭執行が冷淡で習慣的であるの故に、損害をうけてゐることを私は確言しておきたい。

こゝで將來善牧者なる主が、彼等が永遠に救はれむがために諸君に託し給ふであらう靈魂

に就て語る序に、余は力強く附加へておきたい。この事を諸君が決してゆめ忘れぬ様祈る。即ち第一の説教は、最もよき布教、最も美しき傳道はこれ諸君の日毎のミサであることを。其の意味は諸君の掌中にある聖杯のたとへがたき能力以上に、周圍の異教人を感化改心せしめる有力なものも、また己れの司牧する信者を聖成するに、より以上にみのり多き聖寵も存在しないのである。

説教に浮身をやつし、假令雄辯を誇りうるにしても、或は又疲勞する迄に活動するにしても、ミサを準備なく不熱心に行つて顧みないならば、これこそ眞に本末顛倒の甚しきもので其ためにどれだけ聖寵を失ふかは測り知るべからざるものがある。

諸君の聖役の超自然的效果の如何は諸君の外的の活動によらずして内的生活の深淺如何に存し、内的生活の熱心の程度は毎朝のミサのそれに比例するといふ鐵則を決して忘れてはならぬ。

聖フランシスコ・ザベリヨや、アルスの聖主任司祭の如き聖人と雖、彼等の傳道事業より

は、ミサによつてより多くの靈を救つたに相違なきことに疑を挿缺む餘地はない。なぜかといふと、説教も公教要理も、社會事業も教育も、一切の傳道的活動の神的活力は、諸君の聖杯の寶血によつて與へられるから。諸君が司祭となつた曉に、奮發と使徒的活動との凡ての効果の源泉となるものはミサである。諸君が祭壇上でどこ迄キリストの化身たるかによつて眞の使徒としての説教と活動の價値は定まるのである。

之等の大なる眞理は疑ふべくもない。次ぎの簡單なる文句によつてこれらを要約することができる。即ち如何にミサを行ふかが司祭としての諸君の試金石である……。諸君が神の前に如何なる者なるかは、聖祭を如何に執行するかによつて定められるのである。随つて、同一の超自然的論理に根據して、如何にミサを行ふかによつて、使徒たるの價値も定まるのである。聖者なる司祭達のこの聖祭の神秘執行に於ける態度と、彼等の傳道的効果とは、これらの強き主張の眞理なることの拒みがたき證據を提供する。

如何なる司教も其麾下の司祭に對して、一様に雄辯と、あらゆる聖役の種類に對する才能

と、疲勞や艱難に對する耐久力とを要求する譯にはゆかないが、彼等は堅實にして敬虔なる生活を要求することができ、其生活の中心及び基礎としての聖祭の準備及び執行に於ける大なる信仰と熱心なる祈りに細心の留意を喚起するの權利がある。

親愛なる神學生諸子、祭壇上に於ける器械的慣行ほど恐るべきものはなしと知れ。かの神聖崇高なるものを平凡化し、俗化し、司祭を一種の聖職的器械にしてしまふ蛇蝎視すべき習慣性を恐怖せよ。その時こそこの一切の聖寵の源泉を汚し、濫用するの危険が自然に生じてくる。しかもそれは司祭と信者との双方の危険である。両者は叙品式の日から休戚を共にすべく結付けられたのである。

こゝに於て我等の想起せねばならぬのは、我等は主に捧げた愛の多少によつて、重もに審判されるであらうといふ小さき聖テレジアの言葉である。然らば司祭が聖祭の執行に當つて神に捧げた愛の如何によつて主として神の法廷に審かれると余が敢て強調し主張しても、誰か其不當を鳴らし得ようぞ。ミサのオスチアの裡にいと小きものとしてかくれ、屠られ給ふ

た彼の審判者に對して、司祭が生前に有したすべての細やかな、心をこめたやさしさと、愛と、尊敬とを主は必ずや終りの日に酬い給ふであらう。

余は倦まずに繰返す。ミサ聖祭の執行に際して我等の有した司祭的聖徳の程度に應じて、主は我等にその憐れみ深き愛を垂れさせ給ふであらうと。であるから我等の永遠の運命の決定せらるべき場所は、主として祭壇であり、我等の運命と共に委託せられた信者のそれも、こゝに決定せらるゝであらう。

更にもう一つ最後の考察を加へて余の遺言を終ることとする。余がこの小冊子の冒頭に述べておいた主張、即ち將來の司祭としての資格の大部分が既に神學生時代に決定せられるといふ事實に鑑みて、余は今や次ぎの如くに云はんと欲する。

將來の司祭的生活の中心がミサ聖祭であり、それが己れの聖成と司牧する信者の救ひに必要なすべての聖寵の源泉である以上、必然的に神學生たる今日に於ても、聖祭は諸君の内的生活と信心との神聖にして力強い生命の根源となるべきである。であるから諸君は毎日ミサ

に與ることを怠つてはならない。さうして大司祭としてのイエズス、及び其の代理者である司祭が、祭壇上でなすことを理解させ、且味はせる助けとなる様な典禮書によつて、司祭と心を合はせて祈らねばならない。今日から既に誠心誠意、司祭と共にミサを捧げる稽古をするがよい。さうして黙想を、この類なく美しき司祭的な題目に就いて行ふがよい。それから日中に聖體訪問をする時には、其朝の聖祭を想起して感謝し、また將來自ら捧げるであらう處のミサを思うて熱心を振り興されるがよい。余は重ねて親愛なる諸君に冀ふ。希くは聖三位一體に光榮を歸し、聖祭によつて靈魂を救ふことに専心する司祭となれんことを！

ミサがなければ聖櫃も聖卓もない事を考へて諸君の聖體拜領と聖體訪問を決して聖祭から離して行つてはならない。これで諸君の聖體的信心とそれによる凡ての賜物の本源がミサであることをよく了解せられたと信する。

聖木曜日、聖體の祝日、聖心の祝日等には、又月の最初の金曜日に、特別に愛と愼罪の精神をもつてこの祭壇の玄義を黙想して頂きたい。この黙想によつて神學校時代に始まり、全

生涯を通じて、主の愛が諸君の心を奪ひ、諸君の心の裡に「死の如く強き愛徳の炎の燃えしめ給はんことを！」

司祭職に對して自らを準備するに際し、特に毎日のミサ執行に對して己れの心を準備し、それが云はゞ諸君の神聖な固着觀念と迄なる様に希望する。

最大の奇蹟であるミサの毎日の執行に對して心の準備を始めるのに、時期尙早といふ言葉はない。余がかく言ふのは適々聖ヨハネ・ユードの言を繰返してゐるにすぎない。曰く

「もしそれが可能なことならば、聖祭の玄義を之に應しく崇めんがために、司祭は三つの永遠的な生命を有つてゐなければ足りぬであらう。第一はそれに對して完全に準備を遂ぐるために、第二はそれに應はしく執行をなし得んがために、第三はかゝる言語を絶する恩恵を聊なりとも正當に感謝し得んがために」と。

諸君がかゝる余のなした勸告を従順に受容れ、神學校で受けた教訓を忠實に守るならば、而して神學の課程と研究が眞に諸君の心に浸み入つて、更に祈りと敬虔な生活によつて神學

校時代に既に余の遺言特に相互に補足する最後の二章、イエズスの聖心とミサの價値とに關する教義を理解し味得する恩寵を與へらるゝならば、我が至愛なる諸子よ、いつの日か諸子の愛する日本は感謝にみちて諸君を祝福するであらう……。何となれば、かくしてこそ諸子はまことに聖フランシスコ・ザベリオの精神と實行とを身に體したる救ひ手、即ち使徒たりうるであらうからである。

かゝる諸君はまた幸なる哉。何となればかゝる心の準備をなして祭壇にある時に、諸君はかの「今日汝われと共に樂園に——またカルワリオ丘上に——あらん」との、イエズス御臨終の御言葉を、聖なる喜びの涙にむせびつゝ聞き、又其意味を悟りうるであらうから。

聖なる司祭にとつて、ミサとは實にかくの如きものである。そは救ひの榮光の樂園、恩寵のカルワリオ山なのである。

十 結 尾

親愛なる神學生諸子よ。余の靈的遺言はこれだけであるが、希くはこの言葉を余の諸子に對する眞に師父としての愛と傳道的關心の印としてうけられむことを望む。

日本滞在中余の諸子に致したる愛と、諸子の祖國に對する感激と、特に余に對して諸子が側より致された子たるの愛情と、その信賴の深かりしだけに、少くとも精神的には諸子とは離別することなく、靈的にできうる限り諸子の間に留り得るに非ずんば到底日本を去るに忍びないものがある……。諸子が反覆閱讀の勞をとられ、特別に毎月の第一金曜日には默想の題目として用ゐて頂くであらう之等の幾員かによつて、余は末長く諸子には説教し得んことを希ふものである。而して主イエズス御自身が其御名によつて、其御榮光のために録せる

この小冊子に活ける註解を施し給ふ様祈つて止まぬであらう。それなくしては余の拙き言葉は決して實を結ばぬであらうからである。

余は諸子に余の寶なる主の聖心を贈らんと欲した。諸子を其御脇腹の御傷口より、生死を越えて永生に至るまで、深く深く聖寵とあはれみの深淵に迄導き入れようと努めた。

諸子よ、希くはそこに留まれ。而して叙品式に近くに従ひ、祭壇に上る大なる日の迫るにつれて、益々この全愛なる聖心の底深く分け入つて、そこに於て、彼の親しき友、熱烈なる使徒となられよ。

諸子が余の靈的の子として幾何かの愛を余に捧げ呉るゝならば、聖なる炎もてイエズスの聖心を愛し、諸子の周圍の人々にも彼を愛させて頂きたい。諸子を聖者にし、且諸子の傳道に實りあらしむべき余の説ける教へを、……勿論諸子がそれに忠實であるならば！……忘れなければ、個人としての余は忘れられようとも、それは余にとつて少しも意に介すべき限ではない。

希くは諸子が初ミサの時にも、臨終の際にも、聖ボナヴェンツラと共に叫び得んことを。

「われ王の心を、兄弟の心を、優れたる友イエズスの心を見出せり……この聖心の裡に活き且死するはいかに美はしくいかによろこばしき哉。とこしへに此處に住ふは如何によきかな！」

希くは御國の格らんことを！

於東京、千九百三十六年十月。

昭和十一年九月廿日印刷・同年九月廿五日
發行・印刷所東京日比谷株式會社ニツボン
プレス・印刷者兼發行者東京市板橋區石神
井關町二丁目一七八小倉虞人・發行所東京
市板橋區石神井關町二丁目一七八公教神學
校・マテオ神父著「遺訓」定價金五拾錢

終

J. Mates Crawley - Boeray
1861